身邊雜記

章景君が戰死したに就いて、偉い役者の追悼號や年譜は他所でもこしらへるからと考へたので、章景追悼の頁を作らうと計畫したところ、高安先生、鴻池、大谷両氏等から御賛成を頂き、山岸荷葉氏からも特に御寄稿があつて、立派なものが出來た。深く謝意を表する。

章景君といへば、私は君に似てゐるのださうである。前にも二度ばかりさう言はれたことがあるし、廣太郎君も折紙をつけてくれた。因緣話、といふ程でもないが書き加へておく。私はよくいろんな人に似てゐると言はれる。役者では我當、八百藏、瀧澤修、その他政治家やらを入れて九人ばかりもある。よほど個性がないのだらうと可笑しくなる。私自身はその誰にも似てゐないと確信してゐるのだが。

此の集は鴻池幸武奮鬪號です——と氏が言つて來られた。文樂評、芝居評等全四篇。私が少し身體が惡かつたので、私としては助かつた感じである。氏の文樂評と私の組討評とを讀み比べると、私の勉强の足りなさがよく分る。少し恥しいが、仕方がない。

正月はほとんど寢正月になつてしまつた。去年來、まだ批評をしない芝居が八つほど溜つてゐる。今度の「京の顔見世」程度で簡單に片附けようと思ふが、さて書き出して見ると、折角のノートを捨てるのが惜しくなる。困つた性分だ。第十一集には「盛綱」の研究を書く。今の芝居の盛綱は全部間違つてゐると思ふ。「藝能祭への道は」は京都帝國大學新聞、「新劇と觀客と」は新聞甲南、「萬代峯子の久子」は新春秋へ發表したもの。收錄する程のことはないのだが、友人に勸められてその氣になつた。然し、いづれも枚數に制限があつたし、スケツチ乃至デツサン程度にとどまつてゐる。讀み捨てゝいただきたい。「新劇と觀客と」は前の「大日向村座談會」に引合ひに出されてゐる、あれである。

音樂批評は素人のお道樂の程度を出ない。讀まされる方が災難といつた位のものだ。

こんなにぐづ〳〵風邪をひいてゐては困る。新聞のゴシップに、大河内傳次郎が年中風邪をひいてゐて、仕事を始めると治ると書いてあつたが、私のも年中だが、仕事を始めると惡くなり、やめると治る。ちよつとの違ひだが、大した違ひだ。